



上智大学創立 100周年  
 上智短期大学創立 40周年  
 上智社会福祉専門学校 50周年



## ささやかな学びの館の船出

No. 2

### 1. 『上智大学』開校への道

ヨゼフ・ダールマン、アンリー・ブシェー、ジェームズ・ロックリフの三人の神父は、小石川の茗荷谷に仮寓をおいて大学設立準備に取りかかった。1910年2月には後に初代学長となるヘルマン・ホフマン神父が来日し、教授要員が増強された。この仮寓の近くには、かつて江戸中期にキリシタン屋敷があって、その取調所で多数の宣教者が棄教

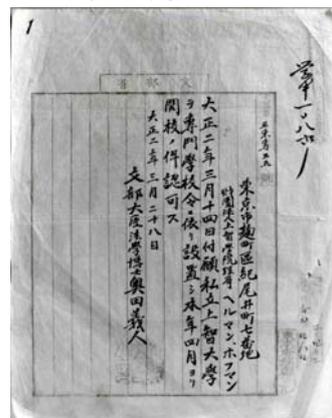


小石川区茗荷谷にあった育英塾で設立準備を行なった



1912年3月25日紀尾井町の土地売買契約終了後の子爵高島鞆之助、ホフマン学長、ゲッテルマンSJなど

を迫られ、獄死した。遠藤周作の『沈黙』のモデルになったジョゼフ・キアラ(岡本三右衛門)、新井白石の尋問を受けたジョアン・バプチスタ・シドッチなどがその代表例である。1911年にやってきたヴィーガー神父は、「過去と現在、多くの悲しみと希望の異常なつながり」をもつ歴史的な場所だと語っている。



文部大臣からの設置認可を伝える文書

設立準備チームは、日本では優秀な人材と多額の設立準備金が必要と訴え、イエズス会から送られた58万100円もの資金で、1911年4月6日、財団法人上智学院を設立した。問題は学校建設用地であったが、各方面からの助言に基づいて選定したのが現在の紀尾井町である。当時は元陸軍大臣高島鞆之助(とものすけ)氏の所有地を中心に、陸軍大将大島久直、赤星鉄馬、田中武兵衛の三氏の邸宅があった。土地売買について折り合いに苦労したものの、結局4,400坪(1万4000平方メートル)の土地を43万円で購入できた。教員はイエズス会員の教授のほか、ドイツ語の大家である水野繁太郎講師や国語・漢文学の碩学である榮田猛猪講師

らが加わった。



水野繁太郎講師

榮田猛猪講師

1913年3月14日に大学設立申請書を提出。28日に文部大臣によって認可され、ここに専門学校令による上智大学が誕生した。予科2年・本科3年で、哲学科、独逸文学科、商科が置かれた。予科とは現在の大学の教養課程に相当し、旧制中学5年を終了した者が

入学できた。3月31日には新聞各紙に志願者募集の広告を掲げた。

●立私上智大学新設  
 ●本大学は内外紳士の賛助に依り青  
 ●年子必に獨逸語を主として教  
 ●育を授け開校の認可を得た文部  
 ●大臣より哲学科、独逸文学科、商  
 ●科、予科の各課程を設け、予科  
 ●二年、本科三年で、各課程は無  
 ●試験にて入学を許す(予科二年  
 ●入學由は四月二十日までとし)

●本大学は畫助館取なも文武官更  
 ●教育に實業家其他一般の學者の  
 ●ために別に獨逸夜學科を設け獨逸  
 ●語及英語の實地應用の習熟を目的  
 ●として文法、譯讀、作文、會話を  
 ●教授す(外國人及び日本人相當)

●三正二年立上智大学  
 ●規則書希望者來校又は郵券二錢送付

## 2. たとえ5名でも授業を始めよう！

「5名いれば開校する」というのがホフマン学長の意志であったが、予科には20名の応募があった。実際の授業が始まった4月21日の出席者は15名であった。同時に社会人を対象にした夜学の語学講座も開設され、1913年3月26日に東京都知事から「私立独英夜学校」の名称で、正式に認可を得た。就業年限2年、土曜日には文学や学術に関する講義が英語やドイツ語で行われた。語学講座は4月11日に開講され、36名がドイツ語講座に、11名が英語講座に登録し、最終的に外国語学校は70名ほどでスタートした。

当時は、予科2年の課程を修了すると本科に進み、3年の課程を経て卒業する仕組みであった。三つの学科生は、予科では一緒に授業を受け、ドイツ語が第一外国語、第二外国語が英語であった。本科になるとドイツ語で行なわれる授業が多かったため、予科時代にド



最初の授業が行なわれた大島館



赤星邸は男子学生寮(後にアロイジオ塾と命名)となる

イツ語を習得することが求められた。このドイツ語の授業では

ホフマン学長自らが、力の入った情熱的な講義を行なった。「ドイツ語の上智」という後代の評価の原点である。

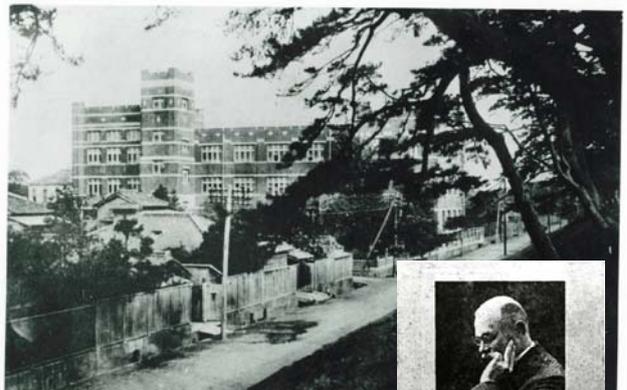


ホフマン学長のドイツ語による講義風景

しかし、いまだ校舎もなく、大島邸を仮校舎に赤星邸を寄宿舍としていたが、1914年9月に待望のレンガ造りの3階建て校舎が竣工。建坪232坪、延750坪で、屋上に庭園のある豪華なものであった。設計者はヤン・レッツルというチェコ人で、広島の高島物産陳列館(今の原爆ドーム)を設計した人物である。新校舎はゴシック建築で、その赤レンガ色は江戸城外濠(現在グラウンド)の土手の老松とマッチして、あたかも中世の城を思わせるものがあった。「玄

関を入ったホールにはゲーテとシラーの胸像が左右に置かれ、廊下や教室の天井も高かった」と『上智大学五十年史』は伝えている。

しかし、この新校舎も10年後の関東大震災で一部瓦解し、ザビエルの夢とローマ教皇の期待をのせた上智大学の船出は、前途多難を思わせた。



1914年に竣工した赤レンガ校舎。校舎内部(左)と外観(右)。ヤン・レッツル(右下)の設計による

